特務部隊はシャーマン！？

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特務部隊はシャーマン！？

【Ｎコード】
Ｎ４４７１Ｚ

【作者名】
秋月秋代

【あらすじ】
転生者はシャーマンの続きモノ。

光ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

～第零廻～　プロローグ

▼三人称▼

時空管理局地上本部、レジアス・ゲイズ少将は嘆いていた。
ミッドチルダで起きる犯罪の数々。
優秀な局員は本局勤め、本局の連中は次元世界の取締ばかりで、地上のことを蔑ろにする……。
予算も本局とは天と地の差。
そして何より戦友達（ともたち）を六年前に失い、己の正義を見失い広域次元犯罪者に指定されてるジェイル・スカリエッティに、違法研究をさせている自分に……。

「ワシの正義……あいつと交わした正義。　此処何年耐え続けて来た……自身の正義から目を逸らして来たが……もう無理だ。　そうとも、ワシはこんな事の為に上を目指した訳ではない！！」

長年の良心の責め、机に立てられてる自身と戦友の目に耐え切れず、レジアスは一人職務室で叫んだ。
そしてレジアスは、写真立てを見て一人呟く。

「ゼスト、メガーヌ、クイント……今更かもしれん……だが、今更だからこそワシは、あの頃の自分に戻ろうと思う」

人は、必ずしも正しい道を歩むとは限らない。
甘い言葉に負け、挫折を味わい道を外れる事がある。
しかし、人は道を外れても戻る事が出来る。
レジアス・ゲイズは、六年という月日を経て以前歩いていた道へ

と引き返して行った。
そして遠い未来、レジアスは言う。
「あの時、引き返してて良かった」と……。

▲三人称▲

▼葉生視点▼

今、オレの目の前に頭を下げてる小肥りの男が居る。
彼の名前はレジアス・ゲイズ。
なのは達が、働いてる時空管理局のお偉いさんらしい。
なんでもミッドチルダを救う為に、シャーマンの力が欲しいとかなんとか……。

「頭を上げろ」

「……」

オレが頭を上げるよう言い、レジアスは頭を上げる。

「ふむ、何故シャーマンを知っているとか、シャーマンの力をどう利用するのかとか、どうでも良くなった。　良いぜ、あんたの力になってやる。　精一杯オレをこき使え」

「ありがとう……ありがとうっ！！」

何故オレが此処まで見知らぬ奴の為に言うかというと、単純にレ

ジアスの目が気に入った。
堕ちた濁った部分はあれど、それに負けない程の輝きを見たからだ。

以前聞いたリンディの声、闇の書の中で見せられた人の業、そして転生前にハオから聞いた「愚かな人間」という言葉。
ああ、ああ、確かに人間は愚かだ。
道を踏み外し、外道と堕ちる奴らばかりだ。

転生前のオレも、そんな奴らの一人だったからよくわかる。
でもよ……人は引き返せる。
やり直せるんだ。
見てるか？　ハオ。　人はこんなにも愚かだが、こんなにも愛おしい。

「だが、どうする？　レジアス。　管理局が欲しいのは魔導師なんだろ？」

「っ！　それについては考えがある」

涙を拭き、オレの質問に答えるレジアス。

そしてレジアスの考えとは、以下の通りらしい。
シャーマンと言っても、オレにリンカーコアがあるとの事、ソレを利用してリンカーコアを持つシャーマンの部隊を創るらしい。

「つまりは覆面魔導師の部隊と？」

「ああ」

「となると数が居るな、わかった。　オレ以外のシャーマンに会わせよう。　だが……」

「わかってる。　ワシが全員口説く！」

「よろしい。　スピリット・オブ・ファイア！！」

――ズガァァアアンッ！！

「ぬぅお！」

オレの後ろにスピリット・オブ・ファイアが現れると、レジアスは驚いたように声を上げる。

「って、待て」

「ど、どうした？」

何故、魔導師じゃないレジアスが見える？　魔導師としての資質がないだけで、リンカーコアはあるのか？

「レジアス……確認の為に聞くが、オレの横に何が居る？」

「ん？　赤い鎧を着た赤髪の女騎士だが」

『ッ！！　葉生』

どうやらレジアスには、シャーマンとしての資質が高いようだ。スピリット・オブ・ファイアの霊力に触れて、才能が開花したかな？　さっきの驚きはベビーから究極形態になった驚きだろう。

「OK、わかった。　それじゃあ、行くとしよう」

「ああ…」

▲葉生視点▲

～第一廻～　スカウト

▼葉生視点▼

レジアスを連れて向かった先は、ニューヨークのとある看護学校。
此処には、三人のシャーマンが居る。

『彼女達に会うのも久しぶりですね』

そうオレに言ったのは、赤く染まったアルトリアだった。
何故赤く染まったのか、これには深くも浅い事情があったわけで、とりあえず何処が赤いのかと言うと……金髪から赤髪へ、青いドレスは朱に染まり、手、足、胸にあった銀の鎧は深紅へと変わった。
変わらないのは、性格と翡翠の瞳だけだ。

アルトリアが戻って来たのは、もう皆と別れたあと……唯一会ったのがマリオンだっけ？

『ええ……』

「葉生……」

「ん、なんだい？　レジアス」

「どうしても入らねばいかんのか？　出来るなら連れ出して喫茶店か何処かで……」

レジアスが周りを気にしながら、小さく主張する。

まぁ女子寮の前で、オレは完全に女子寮に入ってる……そんな状態だからわからんでもない。
女子しか居ない施設。
むさ苦しいおっさんに、ネイティブ・アメリカンの民族衣装を決め込んだ男が二人。
周りの女子からは不審に思われ、レジアスからしたら恥ずかしい、気まずいといった感じだろう。　だが！！

「考えてもみろ？　こっちは頼みに来てるんだ。　あっちから来てもらうのは筋違いだ。　それにこういう所では、堂々としてれば良いのさ」

「そ、そうなのか？」

『いや、私に聞かれても……』

オレの言葉を聞いても信じきれないのか、レジアスはアルトリアに確認するように問い掛けるが、アルトリアは困った表情をしながら答えた。

「ぐぬぬぬ……」

「レジアス……キミの正義は女子寮に堂々と入れない程、ちっせぇものなのか？　だとしたら見込み違いだったかな」

「ッ！　そんな事はない！！　ワシは自分の正義の為なら……あいつと夢見た正義の為なら、女子寮に入る事くらい訳無い！！！」

事情を知らない者から聞いたら、どんな正義だ！　とツッコミが来る発言をしながら、ズンッズンッと女子寮へ入って行った。

「ぷっくく……」

『意地が悪いですよ。　葉生』

良いじゃないか、これくらい。

それに、この程度で尻込みするんだったら、本気で協力するのを止めるつもりだったし……。

「お～い！　早く来んか！！」

おっと、いけないいけない。

レジアスに急かされるように、オレはレジアスの後を追った。

――コンコン…

「はい、どちら様でしょう」

ドアをノックすると、聞こえてきたのは優しくも懐かしい声。

「麻倉葉生だ。　ちょっと…」

「ええっ！！　は、葉生！？」

「ちょ、ジャンヌ！　葉生くんってホント！？」

「私が出て来るわ！」

「「抜け駆け禁止よ！　ミイネ！！」」

ジャンヌが驚いたあとに、部屋の中から潤とミイネの声が聞こえ、段々と慌ただしくなっていった。

「あ～……元気な事で」

『此処数年で、さらに争奪戦が激化したのでは？』

「とりあえず、後ろから刺されるなよ？」

アルトリアとレジアスの言葉が耳に痛い。
好いてもらってるのは嬉しい、嬉しいけどオレとしては良い人を見つけて欲しいよ。
シャーマンとして優秀な種を残す使命とか捨てて、さらに言えば落ち着きがないオレを見限って……。

「プーアル茶です」

「お構いなく…」

あのドタバタが収まったあと、オレ達は部屋に上がらせてもらい、レジアスをジャンヌ達に紹介した。

まぁ、その時にアルトリアの事も一騒動はあったけど、それは今は関係ないので横に置いておく……。

さて此処からが本題、レジアスが掲げる正義。
それを受け止めて、ジャンヌ達が力を貸しても良いと言ってくれるなら良し、もしダメなら諦めるしかない。

「それで何用でしょう」

「急で、貴女方の未来を曲げてしまう話で申し訳ないが、ワシの正義について来て欲しい！！　時空管理局地上本部へ、ミッドチルダに住む人々が安心して暮らせるよう……」

「「「……」」」

沈黙、まぁそう簡単に事が運ぶとは思ってなかったし、この展開は当然だね。

「葉生は……葉生はなんと？」

「ミイネ、ジャンヌと潤もだけど……これはキミ達の意思で決めてくれ。　オレが居るから、皆が居るからじゃなくね。　レジアスの意志に、自分の意思で応えてやってくれ」

「ワシからも、お願いする」

「「「ッ！！」」」

オレの言葉に、賛同するように言うレジアスにジャンヌ達は驚く。
当然だろう。

力を貸してくれと言っておきながら、オレがついて行くと言えばついて来るのに、それに頼らないからだ。
レジアスが望むのは、レジアスの正義に共感する者だけ……。
「わかりました。　それでは一週間……時間をください」
「「私にも……」」
「わかりました。　では、一週間後……玄関の方に居ます」
こうして、最初の勧誘が終わった。
オレとレジアスは、すぐに退室して次の場所へと向かった。

ニューヨークからインド。
スピリット・オブ・ファイアのお陰で、素早く移動する事が出来た。
そして、インドに居るシャーマンは一人。
悟りを開き、人々を救い導くシャーマンを目指す……サティ・サイガン。
闇の書事件の時に、オレを救った西岸サチである。
「サティ」
「葉生！　…っとそちらは？」
「時空管理局地上本部所属のレジアス・ゲイズだ。　本日は貴女を

勧誘しに来ました」

「勧誘……」

サティが呟きながら、レジアスの言葉を返す。

そしてジャンヌ達に言った事を丸々偽り無しに言い、サティもまた考える時間が欲しいと言ってきた。

期限は三日で十分らしい……。

次に来たのは中国だ。

此処に居るのは、オレの友達にしてライバル。

ハオより、五大精霊が二つ……スピリット・オブ・サンダーとスピリット・オブ・レインを授かったシャーマンだ。

ちなみにオレは三つ。

一つはスピリット・オブ・ファイア。

一つはスピリット・オブ・ウィンド。

一つはスピリット・オブ・アース。

といっても、ウィンドとアースは預かってるだけだがな。

まぁそれは置いといて、そんなハオに認められたシャーマンの名前は、道蓮。　潤の弟だ。

そして、蓮の他にも二人居る。

蓮の許婚である、カンナ・ビスマルクとマチルダ・マティスだ。

彼女達は一族の修行に耐え、さらには独自の修行法を編み出してジャンヌ達と同レベルまで行ったのだ。

そこから超・占事略決を教えたりと、さらに強くなった。

もっともそれは数ヶ月の天下で、すぐにサティとマリオンに抜かれたけどね。

「よく来たな。　姉さんから聞いてるから説明は不要だ。　結論から言うと、時間をくれ……明日には決めておく」

どうやら、サティから行ったのは正解だったかな。
ニューヨークから中国へ行ったら、潤の連絡は無駄になってただろう。

「もっとゆっくり決めても構わないんだが……」

「いや、蓮が明日までって言うんだ。　明日までに答えは出るよな？」

「当然だ」

「それを聞いて安心した。　さぁ次で最後だ」

「あ、あぁ……」

さて、問題はマリオンか……。
後に後にと考えてたら、結局は最後になったな。

「レジアス……最初に言っておく」

「なんだ？」

「最後の人物だが、どんなに言葉を並べようとも、本人の意思というのは諦めた方がいい」

「どんな人物なんだ？」

「オレ至上主義。　オレが居れば自分の考えを無視して、オレについて来る」

なんせ離れる時もギリギリまで迷ってたし、今でも声を掛ければついて来るからなぁ。

「……どうすればいい」

「こればっかりは、しょうがないさ」

如何（いか）にレジアスの言葉を聞き、自分で考えろと言っても、理由はオレについて行くになるからな。

『良く言えば純真、悪く言えば陶酔……小さなスピリット・オブ・ファイアですからね。　彼女は……』

言うな、アルトリア。

イタリア。

とある場所にある、ぬいぐるみ店。

――カランカラン♪

「いらっしゃいませ、葉生様」

扉を開けると目の前に、長い金髪をツインテールにして、黒いワンピースを着たマリオンが出迎えてくれた。

「久しぶりだな。　オレの言いたい事は……」

「わかってます。　でも私は……」

「マリオンの事は、わかってるつもりだ。　レジアス……」

「どうしてもダメか？」

「無理だ」

「わかった……」

「すまないな……」

レジアスに詫びて、オレはマリオンと向き合う。

「……オレと共に来い。　マリー」

「はい！」

ニッコリと、明るい笑顔を見せるマリオン。

まったく、変わらないな……。

▲葉生視点▲

～第一廻～　スカウト（後書き）

キャラクターのプロフィールって要りますか？

～第二廻～　答え

▼葉生視点▼

マリオンが暮らしてる部屋に、一晩泊まった次の日。
目を開けて隣を確認すると、やっぱりというか案の定というか、マリオンが裸で寝ていた。

「……」

「ん～……はおさまぁ」

起き上がろうとして体を起こすと、マリオンが腕に絡みついて動けない。
仕方なしに、横に置いていた菓子の蓋（当然、缶の）を手に取り……

――ガンガンガンガンッ！！

マリオンの頭に、容赦無く叩き付けた。

「～～～～～ッ！？　痛い……」

「目の毒だ、パジャマくらい着ろ」

「はい」

こうやって毎度毎度注意して、ちゃんと返事するがマリオンは一

向に、パジャマを着てくれない。
ちなみにコレは旅に出て、一ヶ月頃から始まった事だ。
久しぶりに再会して直ってると思ったが、どうやらオレの考えが甘かったらしい。

『元々、彼女を小さいスピリット・オブ・ファイアと評したのは、葉生ですよ？』

ああ、オレが甘かったよ！　甘いよ！　オレは！！　だからそんな目で見るな、アルトリア！！

さて読者諸君、此処でスピリット・オブ・ファイアが嫉妬しないの～とか思うかもしれんが、スピリット・オブ・ファイアが嫉妬するのは、他の霊とオレが親密になった時だけで、生きた人間同士が親密になろうが嫉妬はしない。　たまにするが……。

と朝はバタついたが、あれ以降何事も無く、中国へと旅立った。

「よう、もう決まったのか？」

「ああ……」

「久しぶりね。　葉生」

「マリーちゃんも久しぶり～♪」

「久しぶり、カンナ、マチルダ」

「久しぶり……」

蓮を挟むように居るカンナとマチルダに挨拶をして、三人の答えを待つ。

「俺達は入る事にした。　俺達は互いが抑止力だからな、どちらかが傍に居ないとダメだろ」

「ああ、すまないな」

「ありがとう！」

「それで次は何処へ？」

「インドだけど……まだ時間があるから、蓮の所で一泊する予定だけど？」

「構わんぞ」

いやぁ、重ね重ね……ありがたい。

にしても、昔と比べて落ち着いたなぁ……蓮の奴。

これもハオのお陰か？

《呼んだ？》

呼んでないけど、聞きたい事がある。

《なんだい？》

オレと蓮って、どっちが強いんだ？

《難しい質問だね。　巫力では蓮、霊力ではキミと言った所かな》

フムフム、なるほど……オレの方が若干弱いって事か。

《大正解♪》

わかった、ありがとう。

やっぱり五大神二体は、スピリット・オブ・ファイアを以ってしても、厳しいらしい。

でも、大陰陽師の称号は伊達じゃない。

いつかは決着を着けないとね。

「親父、今日は葉生と他二名が泊まる事に……」

――ガヤガヤ

ん？　なんか騒がしくなった？

蓮が開けた扉を見てみると、そこには数百体のキョンシーと巨人が居た。

そして壁には「義息子、歓迎」の文字があった。

――キィイ……パタンッ

あ、扉が閉まった。

「すぐにインドに向かうぞ」

「え？　いや、でも……」

「行・く・ぞ！！」

「はい……」

というわけで、急遽インドへ向かうことになった。

「あれ？　葉生に蓮、カンナ、マチルダ、マリー、レジアスさん」

インドに着いて、まず向かったのがサティが住んでる家。

本当は、明日の方が良いんだけどね。

「親父がウザかったから、すぐに来た」

「すまんな、サティ」

「いえ、大丈夫ですよ」

サティの許可が出て、オレ達は家の中へ入った。

そのあとレジアスに声を掛けて、シャーマンの修行を課してみた。

しばらく見ていてわかったが、やはりレジアスにはシャーマンの才能があるらしく、どんどんその才を開花させて行った。

「……レジアス」

「ぬ、なんだ？　蓮」

「お前、シャーマンキングの修行をしないか？」

「蓮？」

今まで黙って見ていた蓮が、レジアスにとんでもない事を言い出してきた。

シャーマンキングの修行。　それは、オレと蓮が受けたモノだ。

確かにソレを受ければ、レジアスの力は絶対的なモノとなるが、リスクが高すぎる。

「どうする？」

「それを受けれる程の力が、ワシにあるのか？」

「シャーマンの強さは、強靭な精神力だ。　貴様の正義が本物なら、可能だろう（俺は葉生のような霊視は出来んからな。　だから俺は俺のやり方で、貴様の正義を見極める）」

蓮の心の声が聞こえて来る。

そういった意図があるなら、オレからは何も言えない。

「そう言われては引けんな。　受けよう！」

「良いのか？　ああ言ってはなんだが、アレは軽く死ねるぞ」

「構わん！」

「そうか……ならば、逝けぃ！！」

——ドォォオオンッ！！

蓮はレジアスの魂を剥ぎ取り、すぐさまグレート・スピリッツへと送った。

あとはレジアス次第。

「さて、どうなるか楽しみだ」

「レンはどれくらいの期間、ハオの所に居たんだ？」

「三ヶ月だ。　消滅しかかったのは、二回だったかな」

「マゾヒスト」

「黙れ、リア充」

——ブチッ

「許婚が居るツンデレに、言われたくないな」

「貴様は五人だがな！」

「「……」」

沈黙が部屋を支配する。

そして……

――ガキィィイインンッ！！

「「やるかぁぁあああ！？」」

オレはスピリット・オブ・ファイアの腕だけオーバーソウル化し、蓮はスピリット・オブ・サンダーの腕だけオーバーソウル化してぶつかり合い。　オレ達も組み合った。

――ガスッゴスッ！

「「グハッ！？」」

「地球（ここ）で、喧嘩しないように」

頭に強烈な痛みが走った。

翌日。

朝食を取ったあと、サティに呼ばれた。

「私もついて行く事を決めました」

「ありがとう。　これからよろしく」

「はい」

これであとはジャンヌ達だけど、全くといっていいほど不安はな

い。
レジアスは不安で、一杯だったらしいけど……。
「ところで、スピリット・オブ・アースはどちらに？」
『さっき天に昇って行ったのを見たよ』
『私もです』
「担い手の所へ行ったよ」
「では……あの人が？」
「まだわからないけどね。　あ、そうだ……あと三日くらい居座るけど良い？」
「ええ、どうぞ」
「ありがとう」
さて、残り三日。
ハオからの報告で、レジアスは頑張ってるらしいけど、大丈夫かねぇ。

サティの所に泊まって、三日が経った。
レジアスは、まだ戻らない。

「どうしようか？」

「普通に連れていけば良いだろ？」

「いや、レジアスが起きてないと意味がないからなぁ」

「……やはり見極めるのは、見送ってた方がよかったか」

確かに、空気読めなさすぎの発言だったのは認めるよ。
アレは最低でも、一ヶ月は掛かるし……。
でも、止めなかったオレも悪いっちゃあ悪いんだけどね。

《やぁ、待たせたね》

「「ッ！？　ハオ（シャーマンキング）！！」」

《今からレジアスを帰すよ》

ハオから告げられた言葉の意味がわからずに、オレ達の思考が停止する。
三日だぞ？　三日！！　いくらなんでも早過ぎるだろ！！
《急ピッチでやった！　途中から泣いてたけど……》

「「ああ、わかる。　オレ（俺）も覚えがある」」

レジアス……強く生きれ！！

「それじゃあ、レジアスも戻ってきた所で行くとしようか」

「「…「おー」…」」

「生きてる。　こんなにも生きる事が、嬉しく感じるのは初めてだ。
母さん、産んでくれてありがとうっ！！」

うん、一人だけなんか違うけど、今はソッとしておこう。
誰だって母親に感謝する時がある。
レジアスにとって、ソレが今日だったんだ。

というわけで、ニューヨーク。
ところで、みんなは知ってるかな？　ニューヨークって、漢字で書くと「紐育」こう書くんだ。
覚えておくと、なんか良いことでもあるんじゃない？

「時にレジアスの持霊って何？」

「うむ、大地だ」

「大地？」

スピリット・オブ・アースじゃないのか？

「本来の名前は、スピリット・オブ・アースだが……長いから大地と名付けた」

「安直過ぎじゃないか？」

「う、うるさい！」

だいたいミッドって、欧風の名前だろ？　それだったらアースだけでも……

『『『『……』』』』

「ん、なんだ？　スピリット・オブ・ファイア、スピリット・オブ・ウィンド」

「どうした？　スピリット・オブ・サンダー、スピリット・オブ・レイン」

『『『『……』』』』

「「名前が欲しい？」」

なんと言うことか……。

まさか、スピリット・オブ・ファイア達が名前を欲しがるなんて……。

いや、この場合は愛称か……。

しかし、どうする？　完全に予想外だ。

パッとなんて思いつかないぞ。

「スピリット・オブ・サンダーは雷公（らいこ）、スピリット・オブ・レインは霊亀（れいき）だ」

なんか蓮は、すんなりと言ってる。

ヤバい、オレも考えないと！！　それにしても雷公は良いとして、何故霊亀？　玄武が水を司るからか？　亀繋がり？　でも四神の司る力って、ほとんどバラバラだよなぁ。

青龍が司ってる時もあるし、う～む…謎だ。

「さっさと決めた方がいいぞ。　スピリット・オブ・ファイアが嫉妬する」

『……』

そうだった……。

ヤバい、考えろ！　オレ！！　火、炎、太陽……この三つを司る霊的名前。

カグツチは、没だな。

カグツチは、スピリット・オブ・ファイア自身を指す。

というか、五大神として名を連ねた今では、カグツチなんて下っ端辺りじゃないか？

「……アマ」

――ボゥッ！

アマテラスですら納得いかない様子……。

マジで考えねば、死ぬ！！

「はぁ…（スピリット・オブ・ファイアだけの名前を決めれば良い

んだ。　既存の火霊、火の神の名前を決めた瞬間、終わるぞ）」

「……その考えはなかった」

ならば、真剣に考えてやらないと失礼だな。

スピリット・オブ・ファイアを見て、連想する名前。

火琳（かりん）、火煉（かれん）、炎羅（えんら）、炎浬（えんり）。

これでは、火に囚われすぎか。

オレの名前を一文字加えるとどうなる？

「炎生（えんり）……スピリット・オブ・ファイアの炎に、オレの葉生という名前の生をくっつけて炎生と言うのはどうだろう？」

『……』

スピリット・オブ・ファイアから、嬉しいという感情が流れ込んで来る。

うん、気に入ってくれたみたいで何よりだ。

ただし、心の中くらいではスピリット・オブ・ファイアで良いよな？　真名は大事なんだし……。

「あとはスピリット・オブ・ウィンドか……」

どうせならスピリット・オブ・ウィンドにも、オレの名前を加えたい。

葉……は、ば、ぱ、よう。

風……かぜ、かざ、ふ、ふう。

そしてスピリット・オブ・ウィンドの性別は女。

風（ふ）＋葉（よう）＝風葉（ふよう）

「風葉でどうだ！」

『……』

うむうむ、御満悦の様子。

というか、読む人から見て五大神の感情ってわかるのか？　三点リーダーだろ？

《その為に、キミが言ってるんだから良いだろ？》

まぁな……。

さて考え事をしていたら、ジャンヌ達が居るではないか。

という事は……

「ああ覆面魔導師部隊が完成したんだ！！」

レジアスの喜びに満ちた声が、周囲に響く。

周りの視線が痛いが、今は祝福しておこう。

「さぁて、此処から本腰を入れるぞ！　会議だ、レジアス！！」

「わかってる！！」

▲葉生視点▲

☆～プロフィール～☆

▼葉生と葉生の持霊▼

名前：麻倉　葉生

性別／年齢：男／１７歳

学歴：小学校　卒業

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：１２５億４０２万（１２５億）

備考：各世界の霊山に登り、シャーマンキングであるハオの修行で１７歳という若さで、大陰陽師へと成長を遂げた。

持霊１

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別／ランク：女／神

霊力数（前回値）：３０億（２０万）

媒介：酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：剣術・燃焼

備考：葉生の最初の持霊。
以前と違って姿が一変しており、新たな能力も手にしてる。

持霊２

名前：炎生（えんり）

真名：スピリット・オブ・ファイア【究極形態】

性別／ランク：女／五大神

霊力数（前回値）：６０億（一）

媒介：酸素・燃焼物・熱源

戦闘スタイル：燃焼

備考：葉生の為に誕生した二体目の五大精霊。
しかし凄まじい成長を見せて、五大精霊の枠に収まりきれずにシャーマンキングが、新たに五大神という枠を作る程。
ちなみに五大神は、その強力故か互いが抑止の存在となっている。

持霊３

名前：風葉（ふよう）

真名：スピリット・オブ・ウィンド

性別／ランク：女／五大神

霊力数：６０億

媒介：空気・風

戦闘スタイル：気流、気体、気圧の制御

備考：五大神同士の抑止的存在。

▲葉生と葉生の持霊▲

▼蓮と蓮の持霊▼

名前：道　蓮

性別／年齢：男／１７歳

学歴：中学校　中退（表向きは、転校）

出身地：中国・貴州

巫力数（前回値）：２００億（１０２万４千）

備考：葉生のライバル的存在。
Ａｓ時、葉生との実力差が大幅に広がって以来、修行に明け暮れる
毎日を送っていた所、シャーマンキング直々に修行をつけてもらう
事にこぎつけた。

持霊１

名前：馬孫

性別／ランク：男／精霊

霊力数：１０万６千

媒介：馬孫刀・宝雷剣

戦闘スタイル：刀剣術・雷を操る

備考：蓮の持霊。
道家に仕えてる武将の霊。

持霊２

名前：雷公（らいこ）

真名：スピリット・オブ・サンダー

性別／ランク：男／五大神

霊力数：６０億

媒介：雲・宝雷剣

戦闘スタイル：放電・磁力

備考：五大神同士の抑止的存在で、シャーマンキングとの修行を受けてた蓮の魂に惹かれて、自ら蓮の持霊となった。シャーマンキングもそれを許可している。

持霊３

名前：霊亀（れいき）

真名：スピリット・オブ・レイン

性別／ランク：女／五大神

霊力数：６０億

媒介：水

戦闘スタイル：浸透・溶解

備考：五大神同士の抑止的存在。

スピリット・オブ・サンダーと同じく、蓮の魂に惹かれて持霊になった。
これもシャーマンキングの許可が下りてる。

他にも、李書文や呂布などが居たが、蓮の修行に耐え切れずに、現在はグレート・スピリッツにて療養中。

▲蓮と蓮の持霊▲

▼ジャンヌとジャンヌの持霊▼

名前：アイアンメイデン・ジャンヌ

性別／年齢：女／１７歳

学歴：医療専門学校　自主退学（表向きは、転校）

出身地：フランス・ロレーヌ地方

巫力数：１億７６０万

備考：葉生の許婚にして、神クラスのシャーマン。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：シャマシュ

性別／ランク：男／神

霊力数：５２万

媒介：拷問器具、アイアンメイデンの面

戦闘スタイル：審判（ほぼ死刑というか私刑が多い）

備考：神クラスの霊にして、絶対正義の権化とも言うべき存在。その正義には一切の妥協を許さず、行ってきた審判の殆どが死刑（というか私刑）。

▲ジャンヌとジャンヌの持霊▲

▼潤と潤の持霊▼

名前：道　潤

性別／年齢：女／２１歳

学歴：医療専門学校　自主退学

出身地：中国・貴州

巫力数：１億

備考：葉生の許婚で、キョンシーを操るシャーマン。
その実力は並のシャーマンでは、上位に食い込むというか巫力、戦闘技術から神クラスのシャーマンとなってる。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：孫　明

性別／ランク：女／人間霊

霊力数：１０００

媒介：自身の肉体

戦闘スタイル：肉弾戦

備考：潤の持霊にして、キョンシー。
彼女が使う戦闘技術は、中国の英霊達から得たモノで、よく好んで使うのは馬孫から教わった中華斬舞の亜種（格闘術）、中華乱舞。

▲潤と潤の持霊▲

▼ミイネとミイネの持霊▼

名前：ミイネ・モンゴメリ

性別／年齢：女／２１歳

学歴：医療専門学校　退学

出身地：カナダ・モントリオール

巫力数：１億

備考：葉生の許婚。
当初はそれなりの実力者だったが、麻倉家で修行し、許婚同士と競い合う事で神クラスのシャーマンとして覚醒した。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：ミカエル

性別／ランク：男／聖霊

霊力数：４８万

媒介：光

戦闘スタイル：剣術・レーザー

備考：機械天使ではなく、本物の天使。
天国のコミューンで、他のコミューンを管理してる時にミイネと出会い持霊になった。

▲ミイネとミイネの持霊▲

▼サティとサティの持霊▼

名前：サティ・サイガン

性別／年齢：女／２０歳

学歴：小学校卒業

出身地：日本・東京

巫力数：５０億

備考：葉生の許婚。
許婚の中でも一位、二位を争う程の実力者だが、温厚な性格から戦う事を嫌う。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：ダイニチ

性別／ランク：男／神

霊力数：７０万

媒介：腕釧（わんせん）

戦闘スタイル：大仏パンチ

備考：サティとの修行で、宇宙からの力を受けてセンジュがダイニチへと昇華した。
その強大な力故か真の姿では、世界が壊れるため、何百万分の一にまで抑えてオーバーソウルになる。

▲サティとサティの持霊▲

▼マリオンとマリオンの持霊▼

名前：マリオン・ファウナ

性別／年齢：女／１６歳

学歴：小学校　卒業

出身地：イタリア・ナポリ

巫力数：１００億

備考：葉生の許婚。
サティとタメを張る程の実力を持つシャーマン。
葉生の為ならなんでもし、何に置いても葉生、葉生、葉生。
これほどマリオンが葉生を執着する理由は、実の所マリオン自身よくわかっていない。
葉生との関係は良好だが、周りから見たマリオンは異常の一言。

持霊１

名前：キッド

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：７５０

媒介：西部のガンマン人形

戦闘スタイル：銃撃

備考：マリオンの持霊。

持霊２

名前：■■■■・■■■■

性別／ランク：■／■■■

霊力数：０

媒介：無し

戦闘スタイル：無し

備考：霊力０という異常な霊（霊とすら呼べるかわからない）。
マリオンすら知らない何か。
葉生もシャーマンキングすら気付かない何か。詳細は不明で、おそらく表には一生出てこない。
しかし、マリオンの葉生の執着の原因はコレ。

▲マリオンとマリオンの持霊▲

▼カンナとカンナの持霊▼

名前：カンナ・ビスマルク

性別／年齢：女／２０歳

学歴：高校　卒業

出身地：ドイツ・ザクセン

巫力数：１億３千

備考：蓮の許婚。

当初、葉生の許婚達とは仲が悪かったが、今では仲が良い。
蓮との関係は良好。

持霊

名前：アシュクロフト

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：１７００

媒介：煙

戦闘スタイル：槍術

備考：カンナを守護する老騎士。
その実力は鎧を纏った状態でも、孫明を凌駕する。

▲カンナとカンナの持霊▲

▼マチルダとマチルダの持霊▼

名前：マチルダ・マティス

性別／年齢：女／１７歳

学歴：中学校　中退（表向きは、転校）

出身地：イギリス・スコットランド

巫力数：１億

備考：蓮の許婚。
彼女もカンナ同様、葉生の許婚達と仲が悪かったが、今では仲が良い。
蓮との関係は良好。

持霊

名前：ジャック

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：１５００

媒介：カボチャ人形

戦闘スタイル：ナイフ

備考：マチルダの持霊。
イギリスで恐れらてた連続殺人犯。

▲マチルダとマチルダの持霊▲

▼レジアスとレジアスの持霊▼

名前：レジアス・ゲイズ

性別／年齢：男／５２歳

出身地：ミッドチルダ・ーー

巫力数：７０億

備考：今更、正義を取り戻した男。
長年の良心の責めに耐え切れず、しかし自壊せずに引き返すという強い精神を見せた。
その精神の強さ、正義は、葉生、蓮、ジャンヌ、サティと言った最強のシャーマン達に認められ、さらには大地を司りし五大神、スピリット・オブ・アースにも認められる程。

持霊

名前：大地

真名：スピリット・オブ・アース

性別／ランク：男／五大神

霊力数：６０億

媒介：土・石

戦闘スタイル：重力操作・地震、地割れ等の土と岩関連の災害

備考：五大神同士の抑止的存在。
レジアスの強さに惹かれ、自らレジアスの持霊になった。

▲レジアスとレジアスの持霊▲

～第三廻～　結成、特務部隊！（前書き）

後半、時間飛びます。
ぶっちゃけ、やっちゃった感バリバリ？

～第三廻～　結成、特務部隊！

▼葉生視点▼

さて仲間が集まった事で、作戦会議とやらを開かねばなるまい。
という事でやって来ました、ミッドチルダのとある一軒家。
門前にあるポストには『マクレディッツ』の名前があった。

「誰の家だよ」

「会えばわかる。　というか、驚く」

ニヤリといった感じで、レジアスは笑う。
悪い代官がやりそうな表情とは、死んでも言えんな。
実際、悪の代官並だったらしいし……。

「悪人面した笑いね」

――グサリッ！

言うのを躊躇(ためら)ったオレに反して、ミイネの言葉の剣がレジアスに刺さった。

「……ぐすっ」

オレ達（ミイネを除いた）は、ミッドの空を見てレジアスに激励を贈った。

「頑張れ」と……。

とりあえず人の家の前で、何時までも居るわけにもいかず、オレはインターホンを押した。

――ピンポッ

「は～い」

「「…「「ッ！！」」…」」

チャイムの音が短いとか思うよりも、聞こえてきた声にオレ達は驚く。

子供っぽさを残した声。

今でも思い出せば甦る……ゲームを片手に「はお～」と、こちらに向かって走ってくる金髪の女の子。

一度は命を落とし、シャーマンの秘術を持って、生き返った少女。

「どちらさま～って、はお！　レン！！」

「アリシア・テスタロッサ……」

前と比べて、いろいろと大きくなったアリシアが、ドアを開けて出て来た。

なんか……物凄い違和感がある。

「何故、此処に居る」

「それはこっちのセリフだよ」

アリシアの言葉に、此処へ案内したレジアスの方を見る。
するとレジアスは「どうだ、驚いただろう？」と、言わんばかりのドヤ顔をかましてた。

「レジアス……まさかオレ達の存在を知ったのは……」

「そうだ……プレシア・テスタロッサからだ。　今ではプレディア・マクレディッツと名乗ってるがな」

レジアスの言葉に納得する。
そして、無理矢理聞き出したわけじゃ無い事も……。

「あ、おじちゃん」

「元気にしてたか？　アレシアちゃん」

「うん！」

アレシア……今のアリシアの名前なんだろう。
しかし……こうして見ると、アリシアとレジアスが援助交際してる風にしか見えないんだが……。

「まるで援助交際してる人みたい……」

――ズキュゥウウンッ！！

「ガハッ！」

オレが思っていた事を、今度はマリオンが言葉の銃弾でレジアスを貫いた。

頑張れ、レジアス！　正義のために！！

「アレシア……でいいのか？」

「うん、いいよ。　それで何か……あ、母さん？」

「うん、まぁそれもあるが……中に入っても良いか？」

「良いよ～」

アレシアに感謝して、オレ達はマクレディッツ家に入って行った。

此処でプレシア……今ではプレディアか？　あの人が前のまま若い状態を保っていたら、誰かが言うだろうなぁ……不倫してるみたいと……。

「誰か来たの？」

「うん！　おじちゃんとはお達！！」

「ッ！！　そう……とうとう来たのね」

扉の向こうで聞こえてきた会話を推測するにあたって、どうやらオレ達が来る事は想定内だったらしい。

ならばと、オレ達は扉を開けてプレディアの前に現れる。

「久しぶり、プレシア……いや、プレディアって言った方がいいか？」

「ええ、プレディアの方にして……そして、久しぶりね。　葉生、男前になったわね。　蓮も……」

「老けてると思っていたが、ますます綺麗になったんじゃないか？　プレディア」

プレディアの言葉に機嫌を良くしたのか、蓮もプレディアを褒めたたえる。

許婚を前によく言えるモノだな。

「ありがとう、蓮。　で、葉生は何も言ってくれないのかしら？」

「オレは蓮と違って、ジャンヌ達の前で女性を褒めない。　無いとは思うが、後が恐い」

「そう……それは残念」

「それじゃ、蓮を借りてくよ」

――ガシッ！

「ん？」

「話はマリーちゃんにでも聞くからさ」

――ガシッ

「ぬ？」

カンナとマチルダに両腕をガッチリホールドされて、マクレディッツ家を出て行く三人。

笑いを堪えてるプレディアを見る限り、アレはオレの許婚達も焚き付けようとしてたのだろう。

命拾いした。

「あ、私はレンの所へ行ってくるー」

「気をつけるのよ」

「はーい」

そして今まで見ていたアレシアも、慌てて蓮達の後を追い掛ける。

「アレシアも変わらないな」

「当然よ。　女の愛は、そうそう冷めたりしないわ」

アレシアが蓮の事を好きになったのは、闇の書事件の時だった。

オレが倒れ、フェイトも倒れて元気が無くなったアリシアを蓮が元気付けた事から、好きになったらしい。

で、闇の書事件が解決したあと、告白しようと頑張ろうとするも、中々告白出来ずにミッドチルダへ引っ越す事になった。

そのあとは、手紙のやり取りを繰り返してるが、まだ好きだったとは驚きだ。

「現代社会を生きる女性の愛は、そうそうに冷めるんだけどなぁ」

「それは本当に愛してないだけ……」

「そうか、まぁ話はこれくらいにして、レジアス……会議を始めようか」

「あ、ああ……」

プレディアの話をそこそこに、残りのメンバーで会議を始める事にした。

まず始めにやる議題は……

「管理局は警察や軍みたいに訓練校があるんだろ？　いきなり部隊を立ち上げるのは無理だと思うが……」

「そこについては、ワシの推薦として訓練校に行かず、一般局員としてすぐに働かせる事は出来る」

オレの疑問に、レジアスは問題ないと主張する。

しかし、問題はまだまだある。

「それでも部隊をすぐに立てる事は……」

そう、部隊の建設。

推薦で入った人間同士が、固まって部隊を作るのは無理がある。

「それに貴方のバックに居る最高評議会……」

「最高評議会にとって、レジアスさんは替えの利くの駒だしね」

潤さんの言葉に頷く全員。
一番の問題といったら、最高評議会なんだよなぁ。
出世欲がある人間に、地上本部のトップの座をチラつかせ、靡(なび)いたところでレジアスを切り捨てる。

「……」

それを十分に理解してるのか、レジアスが黙る。

「仕方ない気が滅入るが……レジアス」

「なんだ？」

「今まで通りとは言わんが、最高評議会の下で働け」

「……スパイか？」

「そうだ、お前の正義は地上の平和だ。　あっちがお前を利用するなら、お前もあちらを利用すればいい。　目を付けられない程度にな」

「……それしかない、か」

「相手は時空管理局のトップだからな」

レジアスにとっては、取りたくない策だろうが、トップを相手に啖呵(たんか)を切れば即退場。
レジアスは闇を知りすぎてるからな……。

「不本意だが仕方ないか……」

「となると急にレジアスさんが、私達を推薦入隊させるのはおかしいわね」

「それならワシの娘がおる。　娘はワシの副官だから、推薦は可能だ」

「他にも仲間が必要だな……」

「他にレジアスさんの味方はおられないので？」

ジャンヌがレジアスに聞くと、レジアスは汗を滝のように流していて、オレ達は理解した。

居ないんだな、味方。

「！　そうだ、話せばわかってくれる奴が居る！！」

「ほぅ……誰だ？」

「陸士１０８部隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマだ！」

というわけで、陸士１０８部隊に行って来ました。

「あんたらが、レジアス少将が言ってた奴らか？」

「はい」

「ふぅ～ん。　まぁ俺はレジアスがどう変わったかなんて、信じちゃあいなかったが……あんたらのような目をした奴が、腐ったあいつに付くわけが無い。　レジアス少将からは俺が言っておくよ」

「ありがとうございます」

ジャンヌが頭を下げると同時に、後ろに居るオレ達も頭を下げる。

これで入隊して、すぐにとは行かないが部隊を設立出来る。

とりあえず、数ヶ月は此処で働く事になるかな……。

「あ、そうそう……部隊を建てなくても、新たに部隊が設立するって話なんだが……入ったらどうだ？」

と、此処でゲンヤが爆弾を落としてきた。

「確か部隊長の名前が八神……」

「いえ、私達は地上の治安を守る部隊として建てるので……」

あの会議が終わったあと、プレディアが話してきた。

遺失物管理部機動六課、被害者への謝罪が終わって、管理局が行う裁判で贖罪（しょくざい）として管理局に無償で働く事になった八神はやて。

贖罪が終わっても管理局で働いていて、今では新しい部隊を立ち上げて人を集めてるとか……。

フェイトにも話が来てるらしいが、フェイトは管理局がやってる違法行為の証拠を集めながら、執務官の仕事をしてるため……はやての誘いを蹴ったらしい。

いやはや、頑張ってるねぇ。

「そうかい、まぁ一緒に仕事する時は頼む」

「こちらこそ」

こうしてレジアス、オーリス、ゲンヤの地上本部で有名な三人の協力を得て、オレ達はなのはとはやてらの目をかい潜り、管理局へ入隊した。

オレ達の入隊を知ったのは、フェイトだけだった。

さらに知ったのが、プレディアでもアレシアでもなく、レジアスが使った連休が不自然だと感じて、調べたらってオレ達の存在が出たらしい。

フェイトの調査能力に、戦慄したオレだった。

そして時が流れ一年足らずで、オレ達の部隊が完成した。

後見人がオーリス・ゲイズ三佐しか居ないが、魔導師ランクの低い者が集まった部隊と言うことで、一人だけでも許可がおりた。

そして前々から、部隊を立ち上げるために頑張ってたはやては、一年足らずで設立されたオレ達の部隊を見に来て、久しぶりの再会をした。

▲葉生視点▲

～第三廻～　結成、特務部隊！（後書き）

これから原作介入まで、地上の犯罪者を逮捕しまくります。

～第四廻～　新米部隊長

▼葉生視点▼

部隊の堅苦しい挨拶、他の地上部隊への挨拶を一通り終えて、特務部隊に宛てがわれた部屋に行くと、そこには書類の山が部屋を埋め尽くしていた。

「なんだ、これ」

「我らが特務部隊の仕事」

書類の山から顔を出した蓮が、オレの疑問に答えた。

よく見ればジャンヌもサティも潤、孫明、ミイネ、カンナ、マチルダ、他のみんなも書類を捌いてる。

そしてマリオンは、ガンマンのぬいぐるみで遊んでいた。

「マリオンはしないのか？」

「難しい……」

難しいって、オレが中学で習う事は教えただろうに……。

一枚の書類を取って、内容を確認すると中学生でも出来る物だった。

「マリー……」

「……頑張る」

「それでよし」

さて、オレも始めるとしようか。

隣の部隊長に宛てがわれた内部屋の扉を開けると、真っ白な壁があった。

よく見ると線らしき物があり、火を点せばよく燃えそうじゃないか……。

「……蓮」

「それは部隊長の仕事だ」

「特務部隊のトップに」

「数秒前に失せたから、貴様のままでいい」

なるほどなるほど……。

フッしょうがないな……

「憑依合体……」

「「…「！？」…」」

オレの呟きを聞いて、全員の視線がオレに突き刺さる。

何を驚いてるか知らんが、オレ達はシャーマンだ。

シャーマンならシャーマンらしく、霊に頼るべし……。

事務処理が得意な霊と憑依合体したオレの身体は、霊の書類処理能力を使って捌いていく。
そして一分後には、部屋に溜まった書類は二割を終えた。

フッ一歩だけ、部屋に入れたぜ。

「『なんて言ってる場合じゃないな。　一歩で感動してどうするよ。
というか設立して、なんでこんなにあるんだ？』」

「なんでも各部隊の書類処理が間に合わなくて、どうしようか知恵を絞った結果……新設した部隊に各部隊の処理１０％押し付け……手伝わせようって話になったらしいわよ」

二つ目のオレの疑問に答えたのは、潤さんだった。

というか１０％って、多過ぎじゃないか？

『事件発生、特務部隊は陸士１０８部隊と共に出動してください』

早速特務部隊にも出動要請が出たが、オレ達はぶっちゃけそれどころじゃない。

「『……マリオン、頼んで良いか』」

「はっ！」

「私も出ようか？」

「『頼む』」

「了解」

故に現状抜けても大丈夫なマリオンと、保険にマチルダを二人しか出せないがこれで良いの……か？

しばらく書類処理をしてると携帯が鳴り、出てみると１０８部隊の指揮官からふざけてるのかとお叱りを受けた。

「うちの連中が何か？」

『何か？　ではない！！　なんで二人しか出してこんのだ！！』

「と言いましても、こっちも大量の書類仕事がありまして、出せる人材が二人くらいしか……」

『せめて一個小隊は出せ！！』

おいおい、こっちは各部隊の援軍部隊のようなモノだぞ？　小隊丸々出したら、他の援軍に行けねぇよ。

「そういえば、事件ってなんです？」

『アァ？　立て篭もりだよ！　人質も居るって話だが……』

「それくらいでしたら二人で、いや一人で十分ですよ」

『何を馬鹿なって、おい金髪！　何処へ…』

――ガシャァァアアンッ！！

『何やってんだぁぁあああああ！？』

電話の向こうで何かが割れる音がして、そのあとに１０８部隊の指揮官の怒声、さらに銃の発砲音が聞こえる。

状況を察するにマリオンが侵入の為、ガラスか何かを割って、驚いた犯人もしくはマリオンがオーバーソウルを発動して、発砲したって所だろう。

『葉生部隊長～、今マリーちゃんが敵を捕まえて万事解決！　人質に怪我はありません！　以上、現場からでした～』

『あ、こら勝手に…』

――ブッ、ツーツー

「現場の方はどうでした？」

「ゲンヤさんからどやされそう……」

「……ご愁傷様です」

ジャンヌの問いに答えたら、マリオンが何をしたのか想像出来たのか、ジャンヌ達から哀れみの視線を受けた。

実はマリオンの暴走というか、独断行動はゲンヤさんがいくら注意しても直らず、最終的にオレが注意を受ける始末。

そして今回……今度はマリオンを行かせた上司の責任として、注意を受ける事間違いなし……。

「マリオンを行かせたのは、まずったかなー」

『事故が発生。　特務部隊は……』

「サティとジャンヌよろしくー」

「了解」

「わかりました」

二人に行くよう指示しながらも、書類を処理し続け、さらに部隊をどう分けるかを考える。

まずは蓮を隊長に、潤、孫明。
次にジャンヌを隊長に、ミイネ、カンナ。
最後、サティを隊長にマリオン、マチルダ。

このオーダーを基本に、他のバリエーションも考えてた方がいいかもな。

そんな事を考えながら、部隊長の部屋に集まってた書類は片付いた。

「あとはこれを各部署に送るだけか……。　誰かオレの部屋にある書類を各部署に送ってくれ」

「わかりました」

「終わったなら、こっちを手伝ってくれ」

「はいはい…」

オレの部屋にある書類は、紫色の髪をした一般局員に任せて、オレは蓮達がやってる書類に手を出した。

『海上で事故が発生ーーーー』

「海上なら蓮だけで十分か？」

「ああ、任せろ」

「じゃあ、よろしく」

と、こんな感じで最初の仕事は終わった。

ちなみにこの事をレジアスに言ったら、もう少し部隊の動かし方を覚えろと言われた。

そして案の定、ゲンヤさんからお叱りを受けた。

▲葉生視点▲

～第五廻～　志を一つに！

▼葉生視点▼

特務部隊が設立して一週間。
はやてが休暇を利用して遊びに来た。

「で、なんやの？　これ」

「書類」

「いや、なんで私の前に置くん！？」

なんでと言われても、此処に暇人を遊ばせておく余裕がない。
何故なら、この一週間……マリオンとマチルダがやってくれました。
単独行動に施設の破壊、道路に穴を空けたりといろいろ……。
単独行動はまだ良い……いや、よくないけど結果は良い方向に転がるから良い。
しかし、施設の破壊や道路に穴を空けるのはダメだ。
レジアスと各部隊から苦情が来た。
設立して一週間で、解散の危機ですよ。
まぁレジアスとオレの迅速な対応で、破壊したモノを直したから謹慎処分で済んだけど……。

「だから手伝ってくれ」

「ふざけんなやー！！　こっちは休みやで！！」

「と冗談はさておき、部隊の動かし方について教えてくれ……ってどうした？」

「……いや、部隊の動かし方って……どういう事？」

「どうもこうもオレがやった事と言えば、局員の仕事をしながらオーリス三佐に後見人になってもらい、各部隊の部隊長との交友関係を広めて、部隊を建てただけ」

元々ミッドの平和を守るのが目的だし、シャーマン能力を使うにはシャーマンだけの部隊が必要だからな。

「ヤバ、頭痛い」

「大変だな……」

「あんたの信じられへん発言を聞いて痛くなったんやー！！」

――スパーンッ！！

はやてのハリセンツッコミを甘んじて受けて、はやてに部隊の動かし方について教えてもらった。

持つべきモノは友達だな。

「でも葉生くんらの部隊って、他の部隊と違うんやし……此処は他の部隊と違うやり方にせな、すぐに人員不足になってまうで？」

「確かになぁ。　……九人しか居ないしな……動かせるの」

「というか最大戦力のあんたが出れんのは、痛い所じゃすまんやろ？　私が建てる部隊は、一人一人がエース級に期待の新人達。　私が出れんでも隊長陣がやってくれる。　でも葉生くんらは……」

そう言ってはやては、蓮達が働いてる方を見る。

そして蓮達は一週間でようやく事務仕事になれたのか、書類をテキパキと処理してるが……一般局員と比べると天と地の差がある。

「書類の事もあるけど……チームワークがなってないやろ？」

「まぁ……」

「個人の実力が高いせいで互いに足を引っ張り合い、時には暴走したりする。　せやから……」

そう言って壁に掛けてあるホワイトボードに向かって、蓮達の名前を一気に消した。

「班分けは止めた方がええよ？　……場所や状況に合わせて、行かせるシャーマンを選定する。　最低一人、最大二人やな」

「ふむふむ……しかし前は一人、二人で怒られたが？」

「それは他の部隊長に説明するしかないやろ。　部隊長は、横の繋がりも大切にせなね。　その点、交友関係を広めたんは正しい判断や」

なるほど、いきなり二人だけ行かせて後は現場に任せてたが、それがダメだったのか……。

レジアスが言ってたのも、他の部隊への報告の事を言ってたのか……。

「一騎当千で固めた部隊は、案外弱いもんやで……蓮くん達を扱うんなら、隊長にせな」

「ああ、わかった」

「よろしい」

「で、部下が暴走させないようにするためには？」

「部下に上司という事を認めさせればええんや」

「マチルダやカンナはともかく、マリオン達にまで上司と思われてなかったのか……」

「いや、マリーちゃんはちゃう。　マリーちゃんは、葉生くんの命令以外聞く気ないだけや」

……じゃあ、何か？　マリオンはオレの補佐にでもさせてろと？　いや待てよ……それはそれでありかも？

「とにかく部隊長として、部下にカリスマくらいは見せなあかんで～ほな～」

そう言ってはやては、帰っていった。

とりあえずは、合同訓練を組むか。

そう考えてオレは、ゲンヤさんの所へ電話した。
結果は快く承諾してもらった。
だが今すぐにとは行かず、それならとオレはマリオン達が復帰した後にと重ねてお願いした。
それまでの間、特務部隊は事務仕事をやりつつ、比較的問題を起こしそうにないミイネ、潤、たまにカンナを出撃させた。

そしてマリオン達が復帰して、合同訓練当日。
オレ達は１０８部隊が居る訓練所へ向かった。

「よう…来たな」

「無理言ってすまないな。　で、オレ達の事は……」

「気にすんな。　ああ、言ってある非殺傷設定の魔法が使えんが、治療は完璧に治せるってな。　まぁ殺さない程度なら文句は言わん」

「すまん」

「気にすんなって」

笑顔で言ってる気にするなと言うが、普通は気にしない方がおかしい。
だが周りにオレ達を理解させるには、そういった魔導師だと証明しなくてはならない。
つまりは一人、二人の助っ人で、戦況を圧倒的有利に運ぶ事が可

能だと……。

「というわけで、最初は好きに行動して良いぞ。　その次がチームワークを使った戦闘になる」

「はっ！」

「わかった」

「楽勝じゃない」

「りょ～かいっ！」

「わかりました」

「なんか不安ね」

「激しく同感」

「……」

「はぁ…」

流石は、我らが特務部隊。

声を揃わせようとしないとは……予想通りだ。

「お前らは最初っから最後まで、連携の戦闘だ！　余裕を持って相手をしてやれ！！　特に最後！　俄連携に負けんなよ！！」

「「…「「了解！！」」…」」

対して１０８部隊は、ゲンヤさんの言葉のあとに声を揃えるという、今の特務部隊に出来ない難行を熟(こな)してみせた。
別に馬鹿にはしてないが、実際マジで出来んからなぁ。

数時間後。　状況は泥沼と化していた。
まず蓮達はマジで好き勝手動き、敵戦力を削いでいったが後から後からとやって来る敵に勢いを削がれ、しかも仲間は遠くに引き離されて、助けにもいけない始末。
戦えるシャーマンは、蓮とマリオンだけ……。
他はライフカウンターと呼ばれる死亡判定を知らせてくれる機械が、死亡と判断した。
見事に一人で戦況を覆(くつがえ)すというキャッチコピーを、台無しにしてくれた。
まぁこれもある意味、予想通りなんだけどね。
実際周囲には、「一人で」じゃなく「最小限の人数で」と知らせてある。
「一人で」と知らされてるのは、うちの部隊の今負けてる奴らだけ。

「ゲンヤ部隊長、オレ達の負けだ」

「まぁ…予想通りだったな。　……少し粘りはしたが」

「訓練終了！　特務部隊は１０８部隊の怪我の治療に当たれ！！」

オレの命令に従って、蓮達は治療していく。
その間オレは、これからの事を考えていく……これから起こるであろう出来事に……。

数分後。　治療が終わり、ゲンヤさんに作戦タイムをもらった。
「さて次の訓練が始まるまで作戦会議を開くが、まずはさっきの戦闘についてだ。　お前ら……レジアスになんて言う気だ？」

――ズガァァアアアアアアー――――ンッッ！！

オレの怒りに触発され、スピリット・オブ・ファイアがオーバーソウルとなって現れる。

「蓮、ジャンヌ、サティ、潤、ミイネ……お前達はレジアスの眼を見て、手を貸してもいいと思ったから来たんじゃないのか？　こんなんじゃ、頭を下げに来たレジアスに申し訳ないと思わないのか？」

「「「「「……」」」」」

「確かにあの戦いは好きに行動しろと言ったが、それは裏を返せば仲間の下へ助けにいけるという事。　組織とは助けに行きたくても、上の命令がなければ助けにいけないんだ。　そしてカンナ、マチルダ、マリオン、孫明……」

「「「「ッ！！」」」」

「お前達は自分がついて来た者の顔に、泥を塗るような行為をするな」

「申し訳ありませんでした」

「申し訳ありません」

「すみません」

「ごめんなさい」

怒りを込めて言うと、カンナ達は萎縮して頭を下げる。

どうやら蓮、潤、オレの存在を出すのは効果的だったようだな……。

「次はどうする？　オレが出て指示を出さないとダメか？」

「いや……もう一度俺達だけでやらせてくれ……」

「今度は無様を晒しません」

「レジアスさんの正義に、酬いる為にも」

「勝つ！」

「我が術を持って……」

「我が武を持って……」

「頑張る」

「勝ちに行く」

「徹底的にねっ！」

オレの提案を蓮が蹴り、ジャンヌが、サティが、ミイネが、潤が、孫明が、マリオンが、カンナが、マチルダが答える。

全員の顔にやる気が満ちており、もう何も心配する事はないと感じた。

▲葉生視点▲

～ミッドチルダの詩～　奇跡のクリスマス編（前書き）

※ＪＳ事件が経った後の話になります。

～ミッドチルダの詩～　奇跡のクリスマス編

▼ゲンヤ視点▼

１２月２４日。
世間では地球文化に触発されて、此処ミッドチルダもクリスマス・イヴなんつー日がある。
だからと言って、その日が休みなわけなく。
陸士１０８部隊は、大量の書類に追われている。

「ギンガー！！　こいつを葉生の部隊に持ってけ！！」

「もう、またぁ？　父さんいい加減に葉生さんに甘えるのやめたら？」

と言ってギンガは、書類を抱えるように持ち上げる。
こんなことをして良いのかと言う疑問もあるが、陸の部隊はたいていがこんな感じだ。
他の部隊、部隊長がやっても問題ないような書類は回してる。

「あいつの方が処理速度が速いんだよ」

「今、特務部隊って葉生さん一人だけよ」

ーーピタ

ギンガの言葉に、仕事をしてる手が止まる。

「他の隊の書類仕事も引き受けたり……」

「いや、一人って待て……あいつの部下はどうした！？」

「蓮さん達なら一週間前から帰省してるし、他の人達は有給取ってたかな……なんか日付とか見ずに承認しちゃったんだって……」

「馬鹿だろ……あいつ……」

なんで休暇する日付を見ずに、承認してんだあいつ……。

てことは、あいつ一人で……

「ゲンヤ！　手伝いに来たぞ」

って、あっちから来たよ。

「お前、仕事は？」

「終わらせて来た。　ギンガ、それがうちに回す分？」

「へ、あ、はい」

「了解了解」

「んなもんより、お前はもう上がれ」

ギンガから書類を貰ってる葉生に向かってそう言うが、葉生は「今年もうちの連中が迷惑を掛けたから」とか言って出て行った。

「たく、こっちも書類を押し付けてんだから、どっこいだろうに…

…」

そりゃあ、迷惑と書類……迷惑を掛けた方のがデカイが……。

「やれやれ、終わったら手伝いに行って……の前にあいつの方が終わるな」

「そういえば父さん」

「ん？」

「今夜のクリスマスパーティーなんだけど、葉生さんを呼ぶ」

ん～まぁそれも良いかもしれんな……。

ギンガの話から許婚も帰省してるって話だし……。

「おう、良いぜ。　しかしギンガ……」

「ん？」

「葉生は認めんぞ。　アレは苦労する……特に周りのせいで」

「や、やだなぁ父さん。　わ、わわわ私は葉生さんとそんな……

……うぅ…」

俺が気を利かせて小声で話してやったのに、ギンガは同様を隠しきれずに大声で叫ぶ。

これを見て葉生に気がないと言っても、説得力はないだろ。

ギンガが葉生を意識しだしたのは、何時だったか……。

仕事を再開しながら、葉生がギンガと組んだ仕事を思い出していく。

確かＪＳ事件の終わり頃には、チラチラと葉生を見ては顔を真っ赤に染めてたなぁ。

その前までは、なんともなかったはずだ。

となるとＪＳ事件辺り……ギンガがナンバーズ達に、連れ去られそうになった時しかねぇよなぁ……。

「私は仕事に戻るから、葉生さんに連絡しててよね！？」

「お前が行ってきても良いんだぞ」

「ッ！？」

ボンッ！と割と洒落にならん音を出して、顔を真っ赤にするギンガ。

ショートしてない、よな？

「どうする？　というか大丈夫か？」

「行ってきます！！」

そう言って１０８部隊を飛び出して行った。

ギンガを見送ったあと、俺はレジアスに電話した。

『なんだ……この忙しい時に』

「いや……一夫多妻制って法律を作れないかなって」

『……貴様が何を言ってるかさっぱりわからん。　切るぞ』

「まぁそう言うなって、あんたの娘さんも複数の許婚を持って、しかも幼なじみの執務官とその姉、あと子狸に惚れられてるトンガリに……」

『あんな奴認めるかぁあああーーーーッ！！　あんな重力に喧嘩を売ってる髪にやるくらいなら、長髪の……やっぱあいつも嫌だ……切るからな！！』

――ブッ、ツー、ツー、ツー

……父親ってのは辛いよなぁ、レジアス。

と、娘を持つ者同士の苦悩を共に分かち合った、俺は最後の書類の束に手を掛けた。

本日の仕事が終わり、帰宅しようと準備してると、葉生とギンガが俺が居る部屋にやって来た。

「連れて来たよ」

「オレは良いって言ったのに……」

「おう、じゃあ帰るか」

「うん！」

「あれ？　オレは無視？」

葉生の言葉を全面的に無視して、俺達はナカジマ家へ帰った。

「今帰ったぞ」

「ただいま」

「お邪魔します」

「あ、おかえりーって葉生さん！！」

――ビクッ！！

スバルが出迎え、葉生の名前を大声で言うと、奥に居るであろう娘達が一瞬肩を跳ねたのが、何故かわかった。

まぁＪＳ事件の時、アレだけの力を見せ付けられたからしょうがないか……。

あいつらが葉生に苦手意識を持とうとも、今回はギンガの提案だから受け入れるしかない。

そのうち慣れるだろう。　慣れてくれてほしいなぁ。

そんな事を考えながら、リビングに入るとチンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディとスバルの同僚だったティアナが、パーティー料理を囲んで居た。

「「「「お、おか……えり（ッス）」」」」

「お邪魔してます」

「こうなるから遠慮したんだがな……」

「ただいま。　良いじゃないですか」

さて、こうやってリビングの扉付近で固まってないで、パーティーを始めるか。

「ああ、ゲンヤ……少し用事が出来た」

「帰さんぞ」

「もう帰らないよ。　少し庭を使わせてもらう」

そう言って葉生は、リビングから庭に行った。

何する気かわからんが、まぁ変な事はせんだろ……。

「んじゃ始めるぞ」

「「…「「はーい」」…」」

――ピンポーン！

「ん？」

いざ始めようとしたら、チャイムで邪魔された。

俺が出ようと腰を上げた時……

――ガチャッ！

『ちょ、何勝手に開けてるんですか！？』

『私の家よ？　良いじゃない』

――ピクッ！

聞こえてきた声に我が耳を疑う。

スバルもギンガもティアナちゃんも、見れば眼を見開いて固まっていた。

『貴女は故人でしょ！！』

『それでも私の家よ♪』

――バンッ！　ババンッ！

『メリークリスマス！！』

『メリークリスマス……どうも、妹が世話になってます』

リビングの扉を開けて現れたのは……

「クイント！？」

「「お母さん！？」」

「兄さん！？」

「「「「ッ！？」」」」

俺の妻でギンガとスバルの母親のクイント・ナカジマと、ティアナちゃんの兄であるティーダ・ランスターだった。

「ゲンヤ……いくらなんでも勝ち組すぎじゃないか？」

固まってる俺達の後ろ……庭に続くガラス戸から、あいつの声が聞こえた。

それで全てを理解した。

「お前か……」

「今日はクリスマス・イヴ……奇跡が起きるのは当然だろ？」

そう言って、憎めない笑みを見せる葉生。

まったく……まいったよ。　お前には……。

▲ゲンヤ視点▲

▼三人称▼

ナカジマ家で奇跡が起きてる時、他の場所にも奇跡が起きてた。

衛星軌道拘置所では……

「世間ではクリスマス・イヴと騒いでるが、なんともつまらないモノだよ」

「まったくですわ。　でもまぁ……精々ちっぽけな平和を噛み締めてれば良いんです」

「まったくだね。　クアットロ……さぁ私達にも配膳されたクリスマススペシャル料理とやらを戴こうじゃないか」

――カツ、コツ、カツ、コツ

「ん？」

「「「「？」」」」

いざ料理を食べようとした時、二つの足音が聞こえた。
誰が来たのかと牢から眺めてると、そこにはレジアスが新たな囚人を連れてやって来た。

「なんだキミか……どうしたんだい？　こんな日に……」

「お人よしからのクリスマスプレゼントだ」

「？」

――キィイ…

「入れ」

レジアスの命令に、素直に牢へ入って来る囚人。
しかしその囚人は拘束衣に覆面を着けており、誰かなのかまったくわからない。
スカリエッテイ達は、これがクリスマスプレゼントなのかと首を傾げたが、牢の中に入った囚人の覆面が取れて、スカリエッテイ達を驚かせた。

「メリークリスマスです。　ドクター」

牢の中の明かりが、囚人を照らす。
そこに立っていたのは、死んだはずのナンバーズ、ドゥーエだった。

「レジアス……これは……」

「言っておくが、ワシは反対したぞ！！　じゃあな」

――ガシャァアアアンッ！！

乱暴に牢の扉を閉め、去っていくレジアスを見て、スカリエッテイは理解した。

「くっくっくっ……確かにお人よしだね。　……最高位のシャーマン殿は……ああ、クリスマス……なんて事はない日と思っていたが、悪党の私達にも奇跡が起きるなら……素晴らしい日だ。　メリークリスマス、ドゥーエ」

「「「「「メリークリスマス（ですわ）、ドゥーエ（お姉様）！！」」」」」

そして彼にも……

「まったく……あいつは」

『そう言うなレジアス……』

「ゼストッ！！」

レジアスの前に現れたのは、自分を庇って死に生き返る事を拒んだゼストだった。

レジアスはゼストの姿を見て、オーバーソウルだと理解する。

おそらくソレが友人、ゼストが妥協した蘇生。

『俺だけじゃない。　この方法でクイントやティーダも、一夜限りだが蘇生した』

「そうか……そうか……今夜は飲むか？」

『それも良いが、メガーヌとルーテシアの所で飲まんか？』

「いいのか？　ならオーリスも呼ぶか」

『それも良い』

こうして楽しい笑いと共に、クリスマスの夜は更けていった。

▲三人称▲

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4471z/

特務部隊はシャーマン！？

2011年12月24日05時50分発行